

『もりおかの短歌』秋の部

〈一般部門〉 優秀賞十首

そうごん
莊嚴な

いわてぎんこうあか
岩手銀行赤レンガ

たつの じょうねつ ひか
辰野の情熱みちのくに光る

新潟県 大洲 航

たくぼく せつこ かひ
啄木と節子の歌碑へ

あき ひ まばゆ は
秋の陽が眩く映ゆる

ぼうきよう おか
望郷の丘

盛岡市 河野 康夫

ゆうきゆう とき しゅゆ ま
悠久の時と須臾の間

リンクする

いしがき すき かれは
石垣の隙にさくらの枯葉

山口県 井ノ口 皓

てちょう

手帳より

か もみじ

まつ赤な紅葉すべり落つ

お

いわてこうえん

ゆき

岩手公園はや雪ならむ

愛知県

加藤

美智子

なかつがわ

中津川コスモスの咲く

さ

つうがくろ

通学路

はつかんせつ

いわてさんみ

初冠雪の岩手山見ゆ

盛岡市

西川

政勝

は し

開運橋に立ち

や ま か わ な が

に の ま る

岩手山北上川眺め二の丸跡へ

むね たか

とも

す

まち

胸が昂ぶる親友の住む街

神奈川県

根子

権蔵

れっしやま

列車待ち

いちあく

すなよ

かえ

一握の砂読み返す

もりおかゆ

しはつちか

盛岡行きの始発近づく

群馬県

荒牧

悦子

いしわ さくら たいじゅ
石割りて桜の大樹

はな の
花を載せ

ちからづよ もく かた
力強さを黙して語らむ

大阪府 市場 さと枝

もりおか えき
盛岡の駅のホームに

お
降りたれば

ま てんこう あさ
アキアカネ舞う転校の朝

岐阜県 伊藤 敦

やそなか す たず たくぼく
八十半ば過ぎて訪ねし啄木の

やかた おも
館に思う

わ はる ひ
我が青春の日よ

山口県 柳川 清一

『もりおかの短歌』秋の部

〈ジュニア部門〉 優秀賞

（応募時、中学生以下に限る）

たくぼく

啄木を

まね

しろあと

そうげん

ねころ

真似し城跡の草原に寝転べば

そら

むげん

みらい

空に無限の未来

山口県 横道 玄

【講評】

この頃の日本列島は異常だ。夏に連日各地で最高気温を記録したかと思えば、今年の冬は例年に比し寒くなるという。そんな中、ここ盛岡で刹那の秋を見つけ、歌という永遠の空間に掬い上げた十一首を紹介したい。

東京駅も手掛けた日本近代建築の父、辰野金吾の名を岩手銀行赤レンガへの情熱として歌に刻んだのは新鮮だ。啄木と節子の歌碑そのものが希望に思える。石垣とさくらの枯葉の時間の対比を「リンク」とした表現も好きだ。わずかな時間を「須臾（しゅゆ）」の間とする表現もいい。

空に無限と未来の夢を描く少年が啄木に重なる…。

岩手山、北上川、石割桜と悠久の時を刻む自然。そこに瞬きをする間の生命（いのち）を与えられた私たちが盛岡駅や開運橋、岩手公園で行き交うことは、なんと愛おしいことだろう。私はそこに啄木の歌の核心があると思っている。これらの歌から盛岡の秋を感じてもらえたらと思う。

令和七年十二月選 秋の部

投稿数 百五十一首

選者 山本 玲子